

令和2年度 生命医科学域セミナー I

演題：次世代の診断病理学が果たすべき使命

演者：里見 介史 先生

国立がん研究センター中央病院

病理診断科 医員

日時：令和2年11月20日（金）16時～17時

会場：健康医科学イノベーション棟8階講堂

要旨：

病理学は、顕微鏡の発明による組織学を基盤として化学、免疫学、分子生物学等の技法を取り込みながら発展してきました。診断病理学は、病理学でも特に、外科病理学の発達に伴い確立された、いわば医療の最終診断を担う学問領域です。

脳腫瘍の病理診断は、19世紀のVirchowによる記述的分類法を、20世紀初頭にBaileyとCushingが組織発生学的分類に発展させ、1979年には世界保健機関によるWHO分類として標準的分類が確立されました。それまでの組織学的所見に基づく病理診断は、2016年に出版されたWHO分類改訂第4版において、分子遺伝学を統合させた診断体系に大きく切り替わりました。さらに近年ではDNAメチル化プロファイルが既存の診断精度を凌駕するまでになり、病理診断の概念は転換期を迎えています。

本講演では、脳腫瘍の病理診断の最先端をご紹介します。次の四半世紀で診断病理学に何ができるか、教育・研究・診療の現場で果たすべき役割を議論します。

連絡先：生命医科学域長室 高橋 智
satoruta@md.tsukuba.ac.jp